

---

# 魔法少女リリカルなのは StrikerS 空ヲ舞ウ白キ自由

白銀の翼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは     S t r i k e r s     空ヲ舞ウ白キ自由

### 【Nコード】

N 4 0 5 3 Z

### 【作者名】

白銀の翼

### 【あらすじ】

ユニウス戦役終焉から一年経ったC・E・75。

あれから地球はナチュラルとコーディネイターとの解り合いを進めると同時に、戦火の爪痕を少しでも癒そうと、各国で協力し合っていた。

だが、それも中々進まなかった。

世界各国とプラントに所属不明艦隊とモビルスーツ部隊が現れて世界に小さな混乱を起こしていたのだ。

そんな中、ザフト軍の隊長と特務隊に着任したキラ・ヤマトは、あ

る宙域にて艦隊が停泊しているという情報を得て、偵察兼破壊の為に一人出撃するが。

一方、ある魔法世界ミッドチルダでは、新暦75年の春に発足したある試験部隊と、ある次元犯罪者との戦い、その事件の名前がその首謀者の名前になる程の事件が起きようとしていた。

自由ノ消失（前書き）

自信無い……

## 自由ノ消失

”ブレイク・ザ・ワールド”から始まりメサイア攻防戦まで続いた大戦、”ユニウス戦役”から数ヶ月。

世界はカガリ・ユラ・アスハが治めるオーブ連合首長国とラクス・クラインが治めるプラント理事国が筆頭となり、着実に復興への道とナチュラルとコーディネイターの解り合いを進めていた。

だがその一方で、地球や”プラント”では大きな大戦は起きてはいないが、小規模な混乱は起きていた。

地球各地と”プラント”各地で所存不明の艦隊やモビルスーツ群が現れて、各国を襲撃したからだ。

各国は復興を進めると同時に連携を取り所存不明艦隊を撃破し、目の前の火の粉を振り払う事も同時進行する事にした。

## デブリ帯

無数の星が瞬く漆黒の空間に、無数の岩塊や残骸が漂っている中、一機のモビルスーツが辺りを見渡していた。

純白の四肢、黒と青のツートンカラーのボディ、黄金の胸部砲口と関節部と両手、両腰部に灰色とビームサーベルの柄、そして背中に背負う八枚の深蒼の翼。

自由の大使『ZGMF-X20A』ストライクフリーダム”<sup>④</sup>である。

「おかしいな……」。

確かにこの宙域で所属不明艦隊が停泊していたという情報があったのに何故誰もいないんだ？」

”ストライクフリーダム”の胸部コックピットで操縦するキラ・ヤマトは一人こちる。

自らが所属している超大型空母”ゴンドワナ”を旗艦とするザフト軍月軌道艦隊 戦艦”ミネルバ”に、所属不明艦隊がこのデブリ帯で怪しい行動をしている、という情報を得て、キラ自らが出撃したのだが、結果は雲隠れである。

だがその雲隠れでも怪しい。

通常なら強大な軍隊、それも二つの大戦で英雄の一人と数えられている人物と愛機ならば急いで逃げるが、その際に何か証拠を残したりする事がある。

だがそれが一切無いのだ。

まるで最初からそこにいなかったように。

「念のために、もう少し調べてみるか……」

そう言つて操縦桿スティックを動かした時だった。

ガクンと、機体が揺れて何かに吸い込まれ始めたのだ。

「な、何！？」

慌てながらも原因を探るべく、メインカメラを動かした時だった。

そこにあるのは、どんな星や月よりも強い輝きを放つ光。

その光に吸い込まれていつている。

「チイツ！」

キラは急ぎフットペダルを強く踏み、ブースターを全開にするが構わずに機体はどんどん吸い込まれていく。

そして、機体が光に入っていくと同時に全てのシステムがダウンしていく。

武装も、装甲も、推進力も、ハッチも全てが使えなくなっていく。

そして

「うあああああ！！！！！」

キラの断末魔と共に、機体は光と共に消え去った。

邂逅ノ時（前書き）

上手く出来てるだろうか……？



## 邂逅ノ時

光に吸い込まれて数分後

「……ん、うう……。

ここは……?」

偏光グラスで作られたバイザーを持つヘルメットの中で、キラはゆつくりと目を覚ますと目を数回瞬きさせて意識を覚醒させる。

薄暗くて余り見えないが感触から、未だに愛機のコックピット内にいるというのが解る。

「”フリーダム”の中、か……。  
取り敢えず今の状況は、と……」

コックピットの中は変わらず薄暗いが、手慣れた手つきで機体の電源を入れると前にキーボードを出し、音楽を奏でるように叩く。

ザフトの紋章<sup>エンブレム</sup>が目の前の画面に現れ、OSが開かれる。

Zodiac Alliance of Freedom  
Team

MOBIL SUIT NEO OPERATION  
SYSTEM

Generation  
Unsubdued

Nuclear  
Drive  
Assault  
Module

Series SD 100-09 SF/IJ 01-34  
152

Z.A.F.T

G.U.N.D.A.M Complex

いつもと同じ、ガンダムのOSが開かれると計器に光が点り、VP  
Sが展開されると同時にモニターやカメラが映る。

だが、カメラに映った光景を見て、キラは愕然とした。

「な!？」

僕はさっきまでデブリ帯にいた筈なのに!」

画面に映ったのはさっきまでのデブリ帯ではなく、日光に当たり白  
銀に輝く雪山だったのだ。

いつの間に地球に?と思ったが空に見える無数の惑星らしきもので、  
地球ではないのが解る。

取り敢えず、今は驚いてばかりはいられない。

キラはハッと意識を取り戻すと、再びキーボードを叩く。

「CPG設定正常、ニューラルリンクージオン濃度正常、メタ運動野パラメータ正常、原子炉正常、全システムオールグリーン……。オールウェポンズフリー？」

画面に映る正常を示す文字を見て安堵の息を吐くキラだが、ある一文に釘付けになった。

この文字が意味する事は、全身に備えている全ての武装が、ドラグーンも漏れずに使えるという事だ。

だが、これだけではまだ信用出来ない。

「……やってみるか」

キラは操縦桿を動かし、左上の翼からドラグーンを一機射出して、メインカメラの前で止めると、上下左右と動かし、試しにビームを一発上空に放つ。

翼端から放たれた翡翠の光弾は、空の彼方に消えていった。

「ドラグーンも使えるか……」

ともかくこれで解ったが、後はこの地に人間がいるかだ。

ここが未開の地なら、キラはここで愛機と共に、愛機に看取られながら死に逝くしか無い。

人が住んでいるなら帰る方法を見つけるまで現地の人達に紛れて住むまでだ。

「人は、と……」

何処かに向けて飛行を始めよう、膝を折り曲げながら周りを見渡した時だった。

ドオオン！！

「ん？」

何かの爆発音をスピーカーが捉え、キラは顔を爆発した方向である右方のサブカメラの方を向き、何倍かズームにして見てみる。

何かが爆発した証拠である黒煙が上がっているが、煙が払われるとその全貌が明らかになる。

そこにいたのは、数機の”ウインダム”と、黄金と桜色の光を纏った見た事も聞いた事も無い武器を持った女性だった。

「……は？」

思わずマヌケな声が出てしまうが、気を取り直して見てみる。

”ウインダム”の装甲表面は、女性達の攻撃でついたのか僅かな細い窪みから丸くて同様の小さな窪みがあるが、その殆どを左手に持った青いアンチビームシールドで防がれている上に、攻撃が入ったとしても内部まで攻撃が入っていない。

更にウインダムもただやられているばかりではなく、右手に持ったビームライフルやビームサーベルで迎撃に出ているが、それが灼熱の温度を持つというのが解っているらしく懸命に動いて躲けていく。

だが、このままではやられるのは時間の問題だ。

「……待って下さい。

今助けに行きます！」

キラは機体を右方に向けさせると、機体の瞬発力と推進力を瞬時に全開にし、その方向に向かっていった。

時は少し遡り、時空管理局古代遺失物処理管理部機動六課は、ヴァイス・グランセニックが操縦するJF704式のヘリで初任務に赴いていた。

機動六課に来た初任務とは、ベルカ自治区にある山岳地帯にてロストロギアを乗せたりニアレールが、ガジェットに襲撃に合い、そのコントロールを奪われ、暴走してしまった。

そのガジェットを殲滅すると同時に、ニアレールの暴走を止め口ストロギアを回収せよ、といういきなりハードな初任務である。

「いきなり新デバイスでのぶっつけ本番になっちゃったけどおっかなびっくりじゃなく、ズバツとやっつけちゃおう！」

「「「はい！」「」「」

「……………はい！」

新人のFW陣の内の三人、ティアナ・ランスター、スバル・ナカジマ、エリオ・モンディアルは勇壮な返事を返すがただ一人、キャラ・ルシエだけが何かに怯えている様な声で返事を返す。

三人も勇壮な返事の裏には緊張が混ざっているが、キャラの場合はそれに相まってある自身の問題がある。

キャラは自身のレアスキルである”竜召喚”に成功した事が無いのだ。

ひょっとしたら暴走してしまうかも知れないという不安が、キャラの心を支配していた。

「キュル……………」

キャラの使役竜であるフリードリヒも、主の心境を察したのか心配そうな声で鳴く。

「キャラ」

「は、はい」

なのはもそれに察したのか、キャラに近付くと視線を合わせて笑みを浮かべる。

「皆とは通信で繋がってる。

ピンチになれば私やフェイト隊長、FWの皆がいるから、心配なくて良いよ」

「……………はい」

安心させる様笑みを浮かべて言うなのはにキャラは少し心が軽くなったのか、少々ぎこちないが笑みを浮かべる。

「よし。」

じゃあ、行ってくるよ。

スターズ01、高町　なのは、行きます！」

出撃合図の声を言うとなのはは開かれたハッチから制服のまま、飛び降りると途中で愛機”レイジングハート”を起動しバリアジャケットを纏うとフェイトと合流し真っ直ぐ空に展開しているガジェット群に向かっていった。

数分後、二人の隊長達により空に展開していたガジェットの殲滅が順調に行われている中、ヘリは無事にリニアレールの上に着く事が出来た。

「さあゝて新人共！

隊長さん方が空を抑えているお陰で無事に出撃地点に着いたぞ。準備は良いかあ！？」

「はい！」

「スターズ03、スバル・ナカジマ」

「スターズ04、ティアナ・ランスター」

「「行きます!」」

出撃合図を言うと同時に、二人はそれぞれの愛機、”マツハキヤリバー”、”クロスミラージュ”を起動させてリニアの屋根に降り立つ。

次は年少組、エリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエの番である。

エリオの方は落ち着いているが、キャロの方は余りの高さからそれとも不安なのは定かではないが心配そうな表情をしている。

エリオはキャロに手を差し出す。

「……一緒に行こう」

「……うん!」

その一言で、キャロの表情は一気に花開く様に明るくなる。

「ライトニング03、エリオ・モンディアル!」

「ライトニング04、キャロ・ル・ルシエ!」

「「行きます!」」



二人は同時に叫ぶと、同じ様にヘリから飛び降りていくと愛機”ストラーダ”、”ケリュケイオン”を起動させバリアジャケットを纏うとリインの現場指揮により四人合わせてリニアール攻略を始めた。

それからFW陣は色々とアクシデントを起こしながらもリニアールを占拠していたガジェット群を殲滅、ロストロギア”レリック”の回収に成功し、後は六課への帰還となった時だった。

「ロングアーチスタッフよりスターズ01ライトニング01へ！！」

未だ飛行魔法で浮いている隊長陣とスバルの作り出した魔法、ウィングロードでヘリに向かっているFW陣の目の前にロングアーチの一人であるシャリオ・フィニーノ、通称シャーリーが切羽詰まった表情で映ったモニターが出て来た。

「十二時の方角より新型のガジェットらしき物がそちらに向かっています！

その数、十！！」

その知らせが六課メンバー全員に入り込み、理解させると一気に緩んでいた気持ちが一瞬引き締まる。

FWには戦慄が走るが、隊長陣は余裕の笑みを浮かべている。

この辺は経験の違いなのか、隊長陣は予想していたようだ。

だが、それが間違いだったというのはすぐに明らかになる。

最初は空に塗した胡麻の様だったが、時間が経つに連れてその全貌が明らかになっていく。

白と青を基調としたボディ、ヘルメットを被った様な頭部、右手には黒い一挺のライフル、左手には青い三角形のシールドを装備した、全高約二十メートルの巨大な人型兵器。

なのは達の最も良く知っているある世界、その世界に最も近く、そして最も遠くにある世界で使われ、量産されているモビルスーツの一種、”ウインダム”である。

「……………これはっ!？」

「……………FW陣の皆は急いでヘリに戻って隊舎に帰還して!」

「け、けどなのはさんとフェイトさんはどうするんですか!？」

「私達は後詰めをしてこいつらを足止めをする！早く戻って!!」

「……………は、はい!」

鬼気迫る勢いの隊長陣からの命令を聞くと、FWは急ぎヘリへと帰

還し、六課隊舎へと向かっていった。

ヘリがその姿を消し、その場には”ウィンドム”群となのは、フェイトのみが残った。

「お友達になりたい、っていう顔じゃないね……。  
行くよ、なのは！」

「うん！」

それぞれが得物<sup>デバイス</sup>と武装を構えて、お互いが中空でぶつかり合った。

数十分後

「はあ、はあ、はあ……」

「き、効くは効くけど、この程度か……」

フェイトの独白通り未知の機体である、”ウィンドム”群には魔法は通用するが、その殆どは左手に装備したアンチビームシールドにて殆ど無力化され、装甲表面に当たった時は、魔法の痕の窪みが僅かに出来るくらいだ。

魔導師、騎士はそれぞれ小さなカテゴリに入れると分けられるが、人間という大きなカテゴリに入れると一緒にになる。

今は例えるなら、まさに象に向かう蟻の様な光景だ。

だが当然、”ウィンドム”達も魔法による攻撃により損傷しているが上記の通りで装甲表面に傷が着いたくらいで内部までには至っていない。

更にただやられているだけでなく、翡翠のビームと桜色のサーベルによる反撃をしている。

更には連携も取るのでかなり厄介だ。

なのは達も灼熱を纏っているという事を直感的に解っているらしく、躲していくが動きはかなり複雑でオーバーだ。

その上に、なのは達にはある問題があった。

「はぁ、はぁ……。」

フェイトちゃん、大丈夫？」

「何とかね……。」

けど、リミッターをかけてるから、これ以上は流石に……」

そう。部隊保持の為に、二人を始めとした隊長陣には魔力リミッターが掛けられる。

機動六課の様に優れた魔導師を何人も所属する為の裏技だが、解除

権限は限定された対象の上司にある。

その上に回数には制限があり、回数を補填するには申請が必要なものだ。

なのは今のままでも都市を破壊出来るレベルだが、場所や状況が余りにも違う。

更に、今ここで限定解除を申請する時間は無い。

思案に耽る二人だが、ここは戦場。

敵がそんな時間等与えてくれる程優しくないし、慈悲もある訳が無い。

二人のその思案を隙と判断し、八機の”ウィンダム”が二人を四方八方取り囲んだ。

「はっ……！」

「しまった！」

悔しげな声を出す二人だが、もう既に時が遅い。

八機がそれぞれ右手に持つビームライフルを二人に向けて、銃口の奥に万物に平等に死を与える光が宿る。

だが、今にも発射されようとしたライフルの銃身を西の上空からほぼ同時に降り注いだ八つの翡翠の閃光が過たず貫いた。

「な……………！？」

「今度は何！？」

驚愕した二人と”ウイングダム”群はそちらに視界を向け、目を見開きまた動きを止めた。

視界に映ったのは、白い装甲、両手に握る二挺のビームライフル、黒と青のツートンカラーをした細身のボディ、黄金の輝きを放つ関節部と両手と胸部砲口、黄色い二つ目のセンサー、左右対象の四本のアンテナ、そして何より目を引いたのは背中に抱く深蒼の八枚の翼。

地上の人間達に裁きを下しに來た天使にも見て取れるその機体に、誰もが釘付けになった。

そして、その機体から声が発せられる。

「そちらの方々、聞こえますか？

こちらキラ・ヤマトです！

援護します、至急現空域から撤退を！」

最も近く、そして最も遠い異界に住む者同士の出会いだった……。

邂逅ノ時（後書き）

ちよつと書き直してみました

## 破壊ノ舞イ（前書き）

はやての性格改變しましたゝ……。



## 破壊ノ舞イ

鋼鉄の大天使

それがなのはやフェイト、そして司令室にいたはやて達が抱いた”  
ストライクフリーダム”への第一印象。

誰もがいきなり助けてくれた未知の機体に唖然としていたが、その機体が出した声で我に返った。

「繰り返しお伝えします！

援護します！

至急現空域から撤退してください！」

「……はっ！」

「……つと！」

また聞こえてきた声に、なのはとフェイトは意識を取り戻す。

確かに今二人は初任務にてガジエットの援軍に来た未知の機体達に逢い、苦戦している。

その機体達に止めを刺されそうになった時に、上空で浮遊している天使の様な機体が、まるで狙った様なタイミングで助けてきた。

いきなり撃ってきたこの機体達と比べて、天使の様な機体に乗っているキラ・ヤマトという人物は少しは信じられるだろう。

「解りました。」

一時、現空域から撤退します!」

「ここをお願いします!」

「はい!」

機体に乗っている青年からの返事を聞くと、二人は線路に沿って撤退していった。

二人が撤退した後、その場にはキラと”ウィンドム”群のみが残った。

八機の”ウィンドム”はビームライフルが失われ、残った武装であるビームサーベルとステイレット対装甲貫入弾を腰から抜き構えており、残りの二機はビームライフルを構えている。

明らかに敵意と殺意を感じるが、キラは全く別の方向の事に驚愕していた。

（サーモグラフィーに体温が見当たらない……!?!?  
遠隔操作システムか独立稼働システムが積まれている機体なのか!  
?）

物凄く今更な事だが、有り得ない事に驚くキラ。

驚きながらもキラは隙を見せていない為に、まだ攻撃は行われていないので大丈夫だが、酷く場違いだ。

だがしかし、それでも驚かすにはいれなかった。

人が乗る事でその力を発揮するのがモビルスーツだが、この世界で未知の兵器であるモビルスーツを人を乗せる事無く動かす事が出来、またこれだけの”ウイングダム”を発進させたタヌキがどれ程の技術と頭脳を持っているのかと疑いたくなる。

だが、それよりもこっちの利点が多い。

それは全力を以てこの”ウイングダム”群を叩き潰す事が出来るという事だ。

人が乗っているのは、未来や現在と過去全てを失わせた上に、見知らぬ人にとっては大切な人だったという事を知れば、その重責をその身一身で背負う。

隊長と特務隊に着任されたキラにとっては、その重責を一身に背負うそれが当たり前なのだが。

「行くぞ……………！」

サーモグラフィースコープを戻すと、キラは静かだがそれで殺気に満ちた声で呟くと両腰からシュペールラケルタ・ビームサーベルを抜き、二刀流の構えを取ると背中を抱く八枚の翼を広げ、フルスピードで急上昇していく。

当然、”ウイングダム”達もそれを見逃す筈は無く、ビームサーベル

やライフル、”ステイレット”を構えブースターを全開にしながら迫り来るとビームライフルやシールドに隠されたミサイル、”ステイレット”を撃って来る。

だが”ストライクフリーダム”は急上昇をしたと思っただけで今度は急降下しながらそれらを躲し、擦れ違い様に、ミサイルを頭部バルカンで破壊すると、ビームサーベルを持っていた先頭二機の胴体を真一文字に斬り捨てる。

真つ二つにされた機体が一拍置いて後ろで爆発するが、気にする予知は無い。

離脱していく白い疾風に、”ウインダム”は未だに撃って来たり迫って来るが、”ストライクフリーダム”は空気抵抗や重力が存在するかも疑わしい鮮やかな動きで射撃を躲すと、蜻蛉返りの状態で両腰部の砲身を前面に展開し、放電する弾丸で今度はサーベルとライフルを持った二機ずつ、つまり四機の動力部を貫く。

異世界での初陣は、まだ始まったばかりなのにも知らず。

機動六課隊舎、ロングアーチ司令室

「正体不明機、アンノウンと交戦！」

は、速い!？」

「正体不明機、アンノウンと再び交戦し、撃墜！  
数、四！」

「な、何て速さなの!？」

目で追えない！

白い軌跡しか見えなかった……」

「大、天使………」

「一体、何者なんや……?」

あの機体とパイロットは……?」

未知の機体と、あの白い機体の戦闘でこつた返していた中で、部隊長である八神 はやてと部隊長補佐であるグリフィス・ロウランはポツリと呟く。

あの白い機体の性能はかなり高いのは解るが、それを自由自在に操るパイロットの技量が人としてのレベルを遥かにも上回っている。

パイロットと大天使の様な機体と同じ様に魔導師も騎士も、高性能デバイスと一つになり手足の様に操るにはそれなりの技量や特訓が必要になる。

現に高町 なのはとフェイト・T・ハラオウン、そして部隊長である八神 はやてもこれで今の様にデバイスや魔法を手足の様に使いこなしている。

だがキラ・ヤマトなるパイロットはあの白い機体を手足の様に操る

というのを通り越している様にも見て取れるのだ。

一体何者なのか……？

そんな思いがはやての胸中にあつた。

司令室での喧騒を露知らず、画面の中の”ストライクフリーダム”はそのままのスピードを維持しながら上昇し両手のビームサーベルをライフルに持ち替え、下に向けて四発のビームを放つ。

放たれた翡翠の光弾は、過たずに”ウインダム”の動力部に直撃、爆散させる。

「……………何故”ウインダム”がここに？」

画面内から音声が届く。

あの白い機体のパイロットが、外部通信をする為のスイッチを入れたまらしい。

思わず聞き耳を立て、あのパイロットの目的を聞こうと、はやて達は次の言葉を待つ。

「……………それと、ここは一体どこなんだ……………？  
地形識別信号も無いし、空も惑星だらけだ」

これではつきりした。

キラ・ヤマトの正体は、次元漂流者だ。

目的は、恐らく情報収集の為に人を探していた所に、あの”ウィンダム”とかいう機体に襲われていた隊長陣を見つけ、それで助けたと察する事が出来るし説明がつく。

それならば警戒心を持つ必要は無いし、また次元漂流者を保護して元の世界の搜索をするのも時空管理局の仕事の一つだ。

「線路に沿って、撤収しよう。  
何かが解るかも知れない」

言うや否や、背中に抱いた翼を広げフルスピードで撤収。画面から消えてしまった。

「……行ってしまいましたね」

戦闘の成り行きを見守っていたロングアーチ、グリフィスが安堵した様に呟く。

いきなり次元の海を通り越してしまいこの世界に来てしまったにも関わらず、未知の機体”ウィンダム”に苦戦を強いられていた隊長陣を助けてくれた。

それだけで人柄が解る。

「……さて、そろそろ私達もお仕事再開やで。  
アルトとルキノはあの機体の予測進路を取って、着地点を割り出しておいてな。」

シャーリーは副隊長のどちらかに連絡。  
どちらか一人でええよ。

後、最後に一つは絶対に気い抜いたらあかんよ。

また”ウィングダム”とか言う機体達がさっきみたいなんが来るかも知れへんからな」

いち早く我に返って指示を出し、ロングアーチもそれに応える様に割り当てられた仕事に取り掛かる。

さっきまでの喧騒はもう、そこには無かった。

「副隊長を呼び出すとは？」

「うん。」

なのはち、じゃなくてなのは隊長とフェイト隊長は今魔力が殆ど残ってへんし、FW陣をまた出撃させる訳にも行かへん。

そこで出るのは副隊長や。

シグナムがヴィータのどちらかでキラ・ヤマトさんを追跡し保護させるという別の任務をな」

成る程、とグリフィスが頷く。

だが、問題がある。

「しかし、追跡しようとしても、あの機体に追い付くのは到底無理だと思いますよ？」

あの機体のフルスピードは戦闘映像を見る限り、あの図体に似合わないかなり速い。

捉えたと思えば瞬時に白い疾風となり、もう既に別の場所にいる。

それをフルスピードで出されたら擦れ違ったと思うともう既に空の



彼方に消えているという事だ。

六課の隊長陣は通常の魔導師と比較しても速い方だが、その隊長陣はもう魔力が殆ど無くなっているし、流石にあれに追い縋るのは難しい。

「それも解ってる。

だからこそ、予測進路を出してそこから割り出せる着地点を出してるんや。

そこに着地出来そうな場所を確認、という訳や」

「フム……」

納得したように頷くグリフィス。

こっちで進路を把握している限り、見失う事は無い。

隊長陣とFW陣が今、戦線離脱している中で頼りになるのは副隊長のみだ。

「シグナム副隊長と連絡が取れました！指示をお願いします！」

「良し……」。

後はアルトとルキノか……。

何か見つかったん？」

「少々待って下さい、今検索しています」

「今向かっているのが北方なのでそちらをベースにやっていますが……、どうも……」

二人の様子から見ると、どうやらまだ見つかっていないようだ。

「北、か……」

はやてが一言呟くと、目の前の大画面モニターを見遣る。

目の前のモニターは全体図とあの白い機体”ストライクフリーダム”が深蒼の八枚の翼を広げて飛行している画面の二つに分割されている。

赤い点が”ストライクフリーダム”であり、後方に伸びている赤い線が通過した道筋、前方に伸びている黄色の線が予測通過の道筋だ。

この道筋の近くに着地点があり、その場にいた民間人に避難勧告を出すのが二人の役目である。

着地する点が無ければ保護する事が出来ない。

エネルギーの面もあるが、核エネルギーで動いている機体だというのをはやて達は知らない。

このまま何もしないで終わるのか、そう思った矢先にアルトが仕事の成果を知らせた。

「……ありました！」

たった一カ所ですが、進路上に着地点が！

モニターに出します！！」

アルトが言うと同時に黄色い線の中にある一カ所の黄色い点がアッ

プで映し出される。

市街地から離れている上に、人が立ち寄る事は無く、広いその場所は着地点にするには持って来いの場所だ。

だが、問題はその場所に対する思いだ。

「え、けどこの場所って……？」

「ルキノ、今は感傷に浸つとる時やない。

シャーリー、シグナムにあの場所に行つて、パイロットを保護するよう連絡を」

「り、了解です」

新たな任務にシャーリーは仕事に思案を寄せる。

実際、運命の類の様な気がする場所だったのだ。

シャーリーじゃなくても驚くだろう。

「……何の因果なんやろ」

北を目指す白い機影を見ながら、はやては消え入りそうな声でポツリと呟いた。

線路に沿って飛行していた”ストライクフリーダム”とキラだったが、もう下には森林や山岳は無かった。

眼下に広がるのは市街地、しかもかなりの大都会だ。

嫌、正確には森林から市街地にこれから入ると言った所だ。

因みにキラは後に外部通信スピーカーのスイッチが入っていたのに気付いて、もう既に切っている。

「漸く市街地か……。  
なら……」

これで漸く情報収集をする事が出来るが、住んでいる民間人を驚かせる訳には行かない。

キラはゆっくりとフットペダルを踏むと、機体高度を少しずつ上昇させていく。

ここが地球ではない事は既に解っているし、またモバイルスーツも無く、この世界にとつての未知の機体がいきなり現れたとあれば、現地の方々を恐れ戦いてしまう。

それを避ける為の判断である。

機体の高度が市街地がミニチュアの立体地図に見えるくらいの高さになると、”ストライクフリーダム”は再び飛行を始めた。

「……どこか着地出来る場所は……」

暫く飛行をしながら市街地の中で、カメラをズームさせながら着地出来そうな場所を探していたが、それが中々見つからない。

このままでは情報収集が出来ないし、機体を隠す事と外に出る事が出来ない。

どうすれば良いか考えていた時、メインカメラの隅に何かが映った。

「飛行場？」

嫌、空港なのか？」

飛行場らしき施設の発見に、偏光グラスで覆われたヘルメットの中のキラの表情は僅かに明るくなる。

だが、それもすぐに疑問の表情になる。

「着陸や離陸する航空機が見当たらない……」

そう、空に行こうとする航空機の機影がなければ、着陸しようとする機影すら見当たらない。

それと良く見れば全くの無人だ。

空から見ても人は確認出来るし、動きも見える。

だがその空港らしき施設にはそれが全く無いのだ。

「……行ってみるか」

思い立ったら吉日。

キラはあの空港施設に着地する事を決めると一度市街地から海に出て、そのまま引き返す形で空港の滑走路に着地した。

ガシャアン……

機体の両足が滑走路のコンクリートと密着した事を知らせる衝撃が伝わると、キラは機体の電源を切りハーネスを外して、偏光グラスを戻して被っていたヘルメットを取る。

艶やかな茶髪のショートシャギーが露わになるが、キラは何か思案に耽る。

頭に思い浮かぶのは、機体に掛けるプロテクトの番号やら何やらである。

ここがかなりの文明が発展しているという事は当然、守る為の法もまた存在する。

その法にこの機体が触れて、調べられたら機体の核部分に触れてしまうという仮定が浮かぶ。

機体とその法、そして民間人を守る為なら、プロテクトはかなり強固にするしかない。

まあ、触れないなら話は別だが。

「……………よし」

ピンと頭の中でプロテクトが思い浮かぶと、キラはキーボードを出し、プロテクトを掛ける。

そして、キラの細い指がエンターキーを叩くとモニターに「プロテクト、完全ロック完了」の文字が浮かぶ。

「よつと……」

ハッチ開閉ボタンを押してシートを競り上げらせると、大きく口を開けて深く深呼吸をする。

人工的に造られた酸素ではなく、自然で造られた新鮮な酸素が肺を、身体を満たしていくのを感じながらもキラは改めて空港施設を見てみた。

人の気配も無ければ航空機さえない、放置された廃墟だ。

「何、なんだ？

ここは……？」

放棄された施設では？と思うが頭を振りそんな馬鹿な考えを振り払う。

一体何処に施設をまるごと放置する様な事情があるのか。

更に今ここでやると言えば、中の様子を見てくるか、あの女性達が来てくれるまでここで待つ位だ。

後者の場合はいつ来るか解らないし、来るとは限らない。

「……行ってみるか」

胸部ハッチの近くにあるラダーワイヤーで地面に降りると、キラは真っ直ぐ廃墟の中に入ってしまった。

コツ、コツ、コツ……

「……ここは、火災でもあったのか？」

響く足音と共に、キラの眩きが響く。

あちこちに崩れた瓦礫や機械が山積みになっており、照明も無いし薄暗い。

壁を見てみると熱に耐えられなかったのか、あちこちで亀裂が走っている。

来ている内にその場所は幾つもあった。

この空港そのものが火災に見舞われたならば何と言う規模だ。

消火作業が間に合わなかったのか、はたまたそれをする暇も無かったのか。

これではいつ崩れるかは解らないし、何処に向かって歩いているか



も解らない。

入口に近い範囲で調査をするしかない。

そう決めて入口付近に戻ろうとした時だった。

ヒュウ……コツ、コツ、コツ……

「風？それと足音？」

隙間風はいくらかあったが、鋭い程の風は無い。

更に足音にも似たその音は、こっちに近付いてきている。

「……誰なんだ？」

キラは近くにあった横通路に身を隠し、壁に背中を密着させては息を潜めて気配を消す。

そーっと壁から身を乗り出し、何者かを確認する。

赤紫を基調とした服に、左手には白い鞘に納まった銀色の長剣を持った長い桜色の髪をポニーテールにした女性が見える。

見た所、何かを探しているらしい。

「そのまま……行つて下さい……」

コッッ……！

聞こえない様にそう呟き、去ろうとした時に、右手に持っていたヘルメットが壁にぶつかり大きな音をたててしまった。

「ん……？」

（……………しまった！）

急いで身を乗り出して見てみると、女性がこっちに気付いたらしく駆け寄って来ている。

今逃げたら、納めている剣で斬られそうな気がする。

そうこうしている内に、女性がキラの前にやって来た。

「キラ・ヤマト、殿ですね？」

「……………そうだと言ったら？」

「貴方を保護します」

何故自分の名前を知っているのか聞きたいが、それは後からでも出来る。

だが保護というからには、何か公共組織でもあるのだろうか？

だがこれで情報収集が出来る。

「……………ザフト軍ヤマト隊隊長兼、最高評議会議長直属の特務隊所属のキラ・ヤマトです」

「私は時空管理局古代遺失物処理管理部機動六課所属のライトニング分隊の副隊長、シグナム二等空尉です。  
よしなに、頼みます」

「はい」

慣れていないのか、懸命に柔らかい態度で接してくる女性、シグナムにキラは笑みを作りながら頭を下げる。

後に聞いた話では、ここは四年前に起きた火災で当時”臨海第八空港”と呼ばれた場所で、シグナムの直属の上司が夢を築き上げる発端となった場所、との事だった。

破壊ノ舞イ（後書き）

上手く書けてるかな……？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4053z/>

---

魔法少女リリカルなのは StrikerS 空ヲ舞ウ白キ自由

2011年12月15日23時47分発行